

水田地帯に於ける酪農協業経営の諸問題

第1報 酪農協業経営と飼料問題

八木 義隆

(佐賀県農業試験場)

YATUGI, Y.

Studies of Co-operative Management of Dairy-farming in Rice Zone

(I) On the problems of feeding

酪農協業経営の発展を阻害している要因は色々あるが、なかでも佐賀平坦地の如き水田地帯では採草地在り殆んどなく、飼料生産が最も大きな問題で、粗飼料の不足が牛乳生産を阻害し、濃厚飼料費をつりあげ、これをカバーするためますます過度の搾乳を強いることになり、濃厚飼料の多給と相まつて種付が悪く、且つ繁殖障害牛が多く経営を圧迫し、たえず悪循環を重ねている。つまり経営不振の厚因はその殆んどが粗飼料不足に集約される。従つてこの飼料問題を如何に解決するか若干の検討を加えてみたい。

佐賀平坦地に於ける酪農経営調査によれば粗飼料の自給率が60%以上のところはどれも黒字経営であり、自給率が50%~60%のところは黒字57%、赤字43%で、自給率50%以下のところは殆んど赤字経営となつている。つまり佐賀平坦地の如き水田農乳生産地帯では粗飼料の自給率60%以上で一応経営が安定すると見ることが出来る。60%以上の粗飼料を自給するためには1頭当り年間18トン内外の粗飼料が必要であるが、現在協業酪農で生産されているのは僅かに10トン内外で自給率にして48%内外に過ぎない。従つてこの18トンの粗飼料を如何に生産し年間を通じて給与体系をうちたてていくかに問題がある。

水田酪農では一応水田裏作が飼料栽培の場となるわけであるが、菅野試験地での調査によれば青刈えんばくの場合、最高収量時期に1回刈りを行つた場合には10a当りの収量は4,280kgで、毎日常必要量だけ刈取つていつた場合には3,040kgの収量となつている。これより見れば搾乳牛1頭当り年間粗飼料18トンを生産するためには42aの飼料作面積が必要となり、毎日常必要量だけ刈取つて青刈給与とした場合には59aの栽培面積が必要となる。

現在佐賀平坦地に於て飼料作面積と酪農所得との関係をみれば、飼料作面積が搾乳牛1頭当り40a以上の農家では飼育頭数が増加する程それに比例して酪農所

得は伸びているが、1頭当りの飼料作面積が40aを下廻る程酪農所得も低下しており、又飼料生産のともなわれない多頭飼育は必ずしも所得の増大にはならず、むしろ低下の傾向さえ見受けられる。現在各協業農家は飼料作圃場として出来得る限りの圃場を提供しているが、しかし各協業体の総経営耕地面積は何れも10ha内外に過ぎず、この飼料基盤の薄弱さが規模拡大を規制し、酪農の発展を阻害している。ここに大きな問題がある。

これを解決する方法としてまず考えられるのが田畑転換の問題であるが、現在の如く利潤、労賃の分配が全く出来ず、飼料圃場の提供が農家経済に著しい影響を及ぼしている現状においては、稲作の減少は農家経済をますます圧迫し協業農家内部より協業化が崩壊する危険性が多分にある。又採草量、酪農の収益性より見て田畑転換自体の経済性も甚だ疑問である。それよりも水田土地利用体系の中で稲作栽培を中核としてその中に如何に集約的な飼料生産をおこなっていくかを考えることがより現実的である。

しかしそれでは飼料供給力が不足するので飼料問題は協業農家内部のみでは解決し得ず、協業内部の増産は勿論、広く協業外にその供給を求めなければならない。そこで考えられるのが非協業農家との裏作小作であり、契約栽培、或は粗飼料の購入である。しかしながら裏作小作には小作契約、耕作権等に色々な問題があり、永続的に飼料問題を解決するためには正式な商取引による飼料の購入或は契約栽培でなければならない。

即ちかりに粗飼料を購入しても酪農経営が成立し得るとすれば、粗飼料が入手出来る限りに於て規模拡大が可能であるし、又もしも飼料栽培が競合作物である麦を経済的に駆逐し得るとすれば、飼料の商品化或は契約栽培は大きく進展するであろうことが考えられる。しかし現実に問題になるのは酪農経営が成立し、

且麦作を駆逐して一般農業労賃なみの労働報酬をあげるためにはどの位の粗飼料の価格が必要かということである。このことについて一応の目安をつけるため佐賀平担地における生産費調査を素材として試算したものが第一表である。

佐賀平担地に於ける夏作期間の平均雇傭農業労働賃金は1日(8時間)当り649円で、飼料を栽培して1日当り649円の労働報酬を得るためには第1表に示す如く、例えば青えんばくについてみれば収量4,280kgの場合、1kg当り1.51円であることが必要であり、イタリアンライグラス1.50円、又青刈とうもろこしは2.05円であることが必要である。

1日当りの労働報酬649円をあげるに必要な飼料単価

作物名	収量	生産費	家族労働報酬			飼料単価
			日	日	日	
青刈えんばく	4,280	6,459	3,978	6.13	1.51	
イタリアンライグラス	4,850	7,272	4,744	7.31	1.50	
青刈とうもろこし	5,050	10,334	6,814	10.50	2.05	

次に問題になるのがこの1.5円ないし2.5円の粗飼料を購入して酪農を行つた場合、経営的に果して酪農が成り立つかどうかということである。元来酪農が経営的に安定するためには乳代に対する総飼料費の割合が50%以下、又乳代に対する濃厚飼料費の割合が30%以下であることが必要だといわれる。そうだとすれば粗飼料費は乳代の20%以下であることが必要となる。即ち第2表に示すように、例えば乳量が4,500kg、1kg当り乳価が30円の場合には粗飼料費の投下限界は2,700円となり、粗飼料18トンを給与するとすれば粗飼料の価格は1kg当り1.5円以下でなければならないことになる。つまり逆にいえば1.5円返は粗飼料を購

入しても経営的に安定し得ることを示している。従つて第2表よりいえることは、例えば乳価が1kg当り30円、乳量4,500kg以上の場合は前に述べた青刈えんばく、イタリアンライグラスを購入しても経営的に充分安定すると見ることが出来、又粗飼料を多給して濃厚飼料費を節減していけば現在の乳価水準では乳量が4,000kg程度にさがつても充分安定し得ると見ることが出来る。

乳価別、乳量別粗飼料費の投下限界と粗飼料の限界単価

乳価	泌乳量	kg				
		3,500	4,000	4,500	5,000	5,500
30円	粗飼料費	21,000	24,000	27,000	30,000	33,000
	飼料単価	1.17	1.33	1.50	1.67	1.83
32	粗飼料費	22,400	25,600	28,800	32,000	35,200
	飼料単価	1.24	1.42	1.60	1.78	1.96
34	粗飼料費	23,800	27,200	30,600	34,000	37,400
	飼料単価	1.32	1.51	1.70	1.89	2.08
36	粗飼料費	25,200	28,800	32,400	36,000	39,600
	飼料単価	1.40	1.60	1.80	2.00	2.20
38	粗飼料費	26,600	30,400	34,200	38,000	41,800
	飼料単価	1.48	1.69	1.90	2.11	2.32

以上要するに現在の水田酪農協業経営は飼料生産が大きな問題であり、今後飛躍的に発展するためにはまず飼料問題が解決されなければならない。しかしながら協業内部に於て粗飼料生産の確立をはかつてそこには一定の限界があり、多くを期待することは出来ない。従つて今後は粗飼料の購入、契約栽培等協業外部で如何にして粗飼料の確保をはかるかが最も重要な問題であり、特に粗飼料の商品化或は流通化問題については技術的、経営経済的或は行政的に充分検討が加えられなければならない。